



○インドの旅(1)

タージ・マハル⇨



島根県でもはじめてのまん延防止等重点措置が適用され、全国的にも感染者の急増が収まらない日が続いています。各種会合なども中止や変更を余儀なくされ、部活動も9月に続き制限されています。まさしく混沌とした状況が続いています。

混沌とは、『広辞苑』によると「物事の区別がはっきりしないこと。また、そのさま。もやもやしている状態。」となっています。事態が流動的で、どう結着がつくかわからないさまとも言えます。このような混沌とした状態がもう2年あまりも続き、閉塞感を持つ人も多いと思います。

かれこれ20年以上も前にインドを旅したことがあります。一週間あまりインドを旅した印象を一言であらわすと、同じ混沌。違う表現をすれば、カオス、無秩序でしょうか…。インド旅行をした人は、何度も行きたくなるか、全くその逆かの両極端だと聞いたことがあります。たかのてるこ著『ガンジス河でバタフライ』を読んだ時、私自身が旅した時の光景やその時々印象を何度も思い出しました。ぜひ読んでみてください。

私は、秩序がしっかりしていないと落ち着きません。仕事や机、そして部屋も整理整頓されていないと落ち着きません。先が見えないと不安になります。多くの人がそうかもしれません。道ばたに牛が横たわり、人が沐浴し、そこを車やオートリキシャ(三輪タクシー)がけたたましくクラクションを鳴らしながら我先にと走っていくインドの街の風景は、カルチャーショックそのものでした。マックバーガーにチキンバーガーしかなかったことも、カレーはチキンカレーばかりだったことも、知識として理解しているのと、体験して理解するのは違うことを実感しました。

海外旅行に行けない状況が続く中、少しでも視野を広げたり、本を読んだりする契機になればと思います。インドでの旅のエピソードを何回か紹介したいと思います。もちろん、20年以上も前のことなので、経済状況も含め変わっていることがほとんどだと思います。ステレオタイプに陥らないよう読んでいただければと思います。

写真はタージ・マハルです。ムガル帝国のシャー・ジャハーンが愛する妃ムムターズ・マハルのために建てた廟(お墓)です。白大理石の美しい建築で、ペルーのマチュ・ピチュと同時期の1983年という早い時期に世界遺産に登録されています。

大理石の白さを守るため、つまり排気ガスなどから守るためという理由でバスの駐車場はかなりタージ・マハルから離れていました。駐車場からは乗り合い自転車に乗り換えました。川岸に建つタージ・マハルですが、離れてはいたものの対岸に煙を出す工場が見え、間近に見るタージ・マハルは少し黄色くなくなっていました…。

いよいよタージ・マハルの敷地に入るというところで、現地ガイドの発言に耳を疑いました。「敷地内では、スリもいて危ない。ひどい例では握手を求められ応じた観光客が、手のひらに忍ばせていた麻酔針で眠らされた上に売り飛ばされたこともあった。ガイドとして付き添い観光客の安全確保のための行動をとると、次私が来た時に報復を受ける。トラブルに巻き込まれたくないからゲートから先は個人責任でお願いしたい。」というものでした。真偽のほどはわかりません。ガイドが怠けたかただけかもしれません。しかし、一緒にいた観光客のうち数人は、ゲート入場前に受付で預けるように言われたかばんが、帰る際に紛失していました。受付の人は預かっていないの一点張りでした。私も、話しかけてきたインド人らしき人が、勝手に英語でタージ・マハルの説明をはじめ、説明を聞いたからと高額なガイド料を請求されました。日本でもまったくスリがないわけではありませんが、日本の観光地は、いや日本は治安が良いのがあたりまえの感覚になっているので、自分の身を自分で守らないといけないと感じたタージ・マハルでの約1時間はとても長く感じたことを覚えています。日本の中世(鎌倉～戦国時代)も混沌とした世だったと考えています。無秩序ゆえの自由があり、だから惣村が発達するなど、農村は団結して安全を確保していました。今の混沌とした時代も、助け合いという団結が重要と感じているところです。